

流れに逆らう

授業への挑戦

学校教育学部
障害児教育コース

田口 則良



学習意欲の乏しさは

誤学習が原因

精神遅滞児の学習意欲は、おおむね、受動的で、課題意識が生じにくく、長続きがしないなどの特徴がある。

これらの欠点に対して、教師は、どのような態度で授業に臨んでいるのだろうか。授業がスムーズに進行することだけを願って、ほめたり、叱ったり、さらに興味・関心を引きそうな教材・教具を準備して行っているのではないだろうか。果たして、精神遅滞児には、このような手立てをしなければならないほど、生来、学習意欲が生じないものであろうか。

以上の疑問を解明するため、筆者はまず、障害児学級の授業の実態を調査することに取っかかりがあった。あらかじめ、学習意欲を高める支援の方法をとらえる評定目録を作成し、できるだけ、教師に気づかれないように注意して、評価することにした。

その結果、授業を主として進めていくのは教師で、子どもはそれに従っているに過ぎない「教師主導型」が多く、子どもが能動的に学習に取り組み、教師は活発になされるように支援する「子ども中心型」が皆無に近い

ことがわかった。

このことは、学習意欲のなさを精神遅滞児の固有の特性であると暗黙の内に肯定し、それに逆らわないで授業が進められていることを意味しており、そのため、ますます、これらの特性を増大させているものと思われる。

教材の難易度と授業スタイルとの関係

そこで、精神遅滞児の授業に教師主導型が多くなる理由を調べてみることにした。軽度の子どもで占められている障害児学級と中程度の子どもからなる同じ人数の障害児学級に、同一教材で、同じ教師に授業をしてみたら、それは、教材が前者の学級では易しくなり、後者では難しくなることを意味していた。

結果は、前者には子ども中心型、後者には教師主導型の傾向が認められるような異なる授業スタイルになったのである。即ち、授業スタイルは、教育内容の難易度に影響を受けることがわかったのである。

流れに逆らう授業の追求

筆者の求める理想的な授業は、適度な難しさの教育内容を設定して、子ども中心型で行なう仕方であるが、研究的にはあえて難しい教育内容を選んで授業を行うことを試みた。

つまり、流れに逆らう授業への挑戦である。

軽度の精神遅滞児に「磁石」教材の授業を行った。子ども中心型（発見型）と教師主導型（説明型）の指導計画を立案し、同じ教師が同一学級に、同じ教育内容で、しかし、少なくとも子どもには違う学習をしていると思わせるような教材を用意して指導を行った。

その結果、授業直後の成績は、両スタイルとも同点であったが、三か月後、再テストしてみると、驚いたことに、子ども中心型では直後より成績が上昇したことである。その理由を調べてみると、①授業後、磁石を買ってもらって遊んでいる。②磁石のついた家具に関心をもつようになっている。③例外的な体験に対して既有知識を固持する。例えば、アルミ製のジュースの缶を見て、鉄だと誤解しながら、引きつかない現象を、それは厚みが薄いからだといはる。

それに対して教師主導型は、「鉄はくっつかないんだ」と既有知識を簡単に訂正する。この傾向は、てんびん教材で行った別の実験授業でも同様であった。

もう一つ、軽度精神遅滞児を対象にした、はり絵学習「魚の遊泳」の授業を紹介しよう。主題、構図、作業の手順を子どもに決めさせ



子ども中心型

教師主導型

る仕方と、一つひとつ教師が指示してさせる仕方の指導計画を、同じ教師が類似した二つの障害児学級に授業した。

その結果、前者の子ども中心型は、自分の発想に従ってのびのびと作っていたのに対して、後者の教師主導型は、常に教師の援助を求める発言や他児の作り方を模倣する受動的学習態度が多く現れた。以上のように教育内容が難しくても、子ども中心型の指導計画が立案でき、それに従えば、学習意欲が高まるということが明らかにできた。

二十一世紀の教育創造

二十一世紀はあと七年後にせまっている。その時代に生きる子どもの教育は既に始まっているのであり、そこに浮上したのが、自発的に課題と取り組み、解決までにいじらせる能力・態度、つまり、「自己教育力」である。筆者が子ども中心型で指向してきた「学習意欲」は、まさにその中核部分の役割を果たす要素といえよう。

二十一世紀の教育創造を思うとき、子ども中心型は、これから先、ますます、高い評価を得ることになる。

プロフィール

(たぐちのりよし)

◇小学校教職歴七年間

◇国立特殊教育総合研究所を経て本学部へ

現在附属東雲小学校長

◇専攻は、精神遅滞児の教育